

京都市立芸術大学移転整備基本計画



京都市立芸術大学（以下「京都芸大」という。）は、建学以来140年にわたり、国内外の芸術界や産業界で活躍する人々を輩出し、文化芸術の発展に貢献してきました。

これまでの質の高い芸術教育を継承しながら、現在の京都芸大の抱える課題を解決し、京都芸大が世界に向けて一層の飛躍を果たすとともに、「市民に愛され、誇りに思っただけの大学」として、京都のまちとともに発展していくよう、京都の玄関口であるJR京都駅東部の崇仁地域への移転整備を進めることとしています。

また、この移転整備によって、この地域が、文化芸術創造の“火床”となり、「文化芸術都市・京都」の新たなシンボルゾーンとなることを目指しています。

この度、市民の皆様からの御意見募集を経て、移転整備の基本方針やキャンパス計画、事業計画等を盛り込んだ「京都市立芸術大学移転整備基本計画」を策定しました。

今後、この基本計画をもとに、世界に冠たる芸術大学として高度な教育研究を実践するとともに、様々な人々が集い、交流する新しいキャンパスを実現するため、移転整備事業を進めていきます。

●目次

1	移転予定地とまちづくり	1
2	移転整備の基本方針	3
3	キャンパス計画	5
4	配置計画	7
5	事業計画	9
6	京都芸大以外の施設について	10

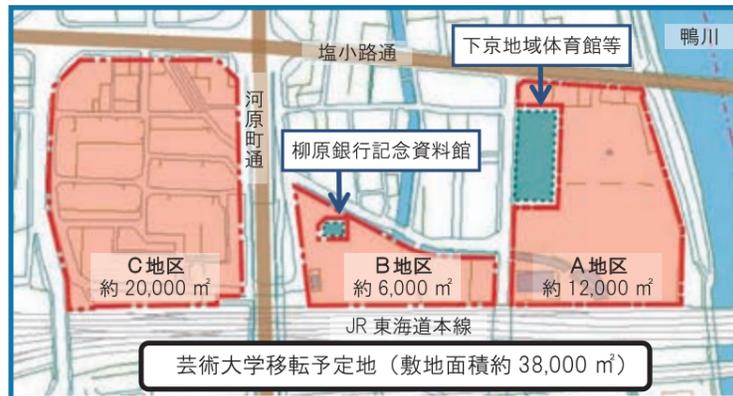
1

移転予定地とまちづくり

① 移転予定地の概要

移転予定地は、JR京都駅の東部に位置する崇仁地域であり、地域内を河原町通（国道24号）や塩小路通等の主要幹線道路が縦横に走り、京阪七条駅にも近く、鉄道や道路等の交通の利便性に優れています。

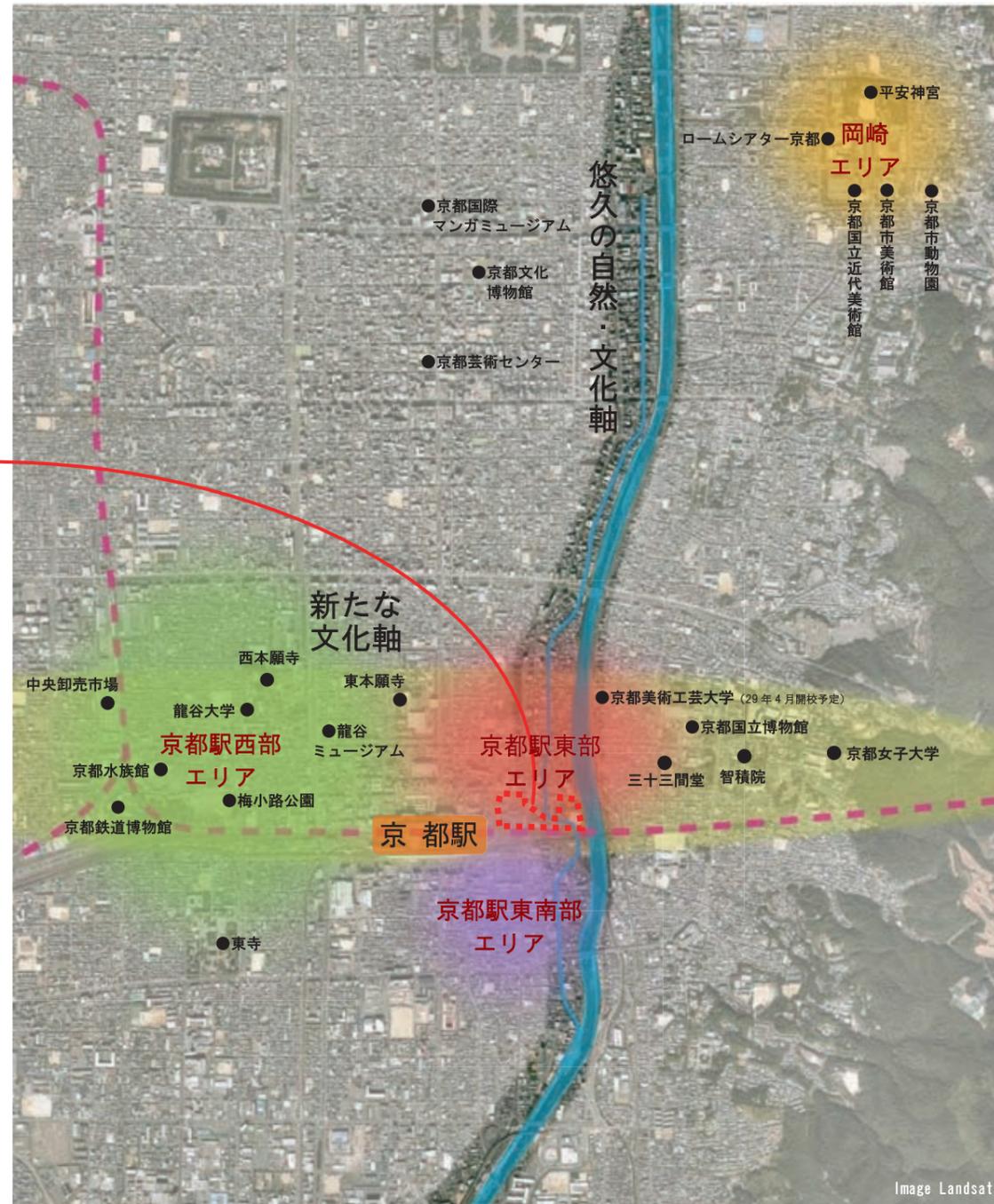
移転予定地は下図のとおり、A、B、Cの3つの地区であり、敷地面積は約38,000㎡です。



京都駅東部エリアは、京都駅西部エリアから京都駅、東山を結ぶ交流や賑わいの創出が期待される「新たな文化軸」、多様な自然が息づき、人々の生活に潤いを与え、誰もが憩い、交流し、新たな文化が芽生える場ともなってきた鴨川、高瀬川といった「悠久の自然・文化軸」、この二つの軸が交差する「文化の十字路口」と言うべき立地にあります。

この立地を生かし、周辺のまちづくりとも連携しながら、世界につながる新たな文化芸術の拠点としていきます。

② 「文化の十字路口」から生まれる新たな文化芸術の拠点



移転予定地周辺では京都駅西部エリア、東南部エリア及び岡崎エリアで、各地域のポテンシャルと個性を生かしたまちづくりが進められています。

この移転整備では、京都芸大が京都駅東部エリアにおける「創造・交流・賑わい」の核となるとともに、文化庁の京都への全面的な移転が決定されるなど、文化芸術によるまちづくりに向けた機運が高まる中、これら周辺のまちづくりとも連携し、京都から産業振興や地方創生を推進する文化による国づくりをけん引していきます。

「文化の薫り漂う、歩いて楽しい岡崎」の推進

岡崎エリア



写真：小川重雄

JR新駅や中央市場の整備などによる京都駅西部エリアの更なる活性化

京都駅西部エリア



京都芸大の移転整備を核とした崇仁地域を中心とするまちづくりの推進

京都駅東部エリア



「文化芸術」と「若者」を機軸としたまちづくりの推進

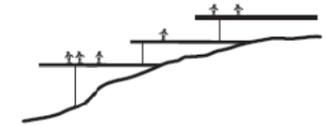
京都駅東南部エリア



2

移転整備の基本方針

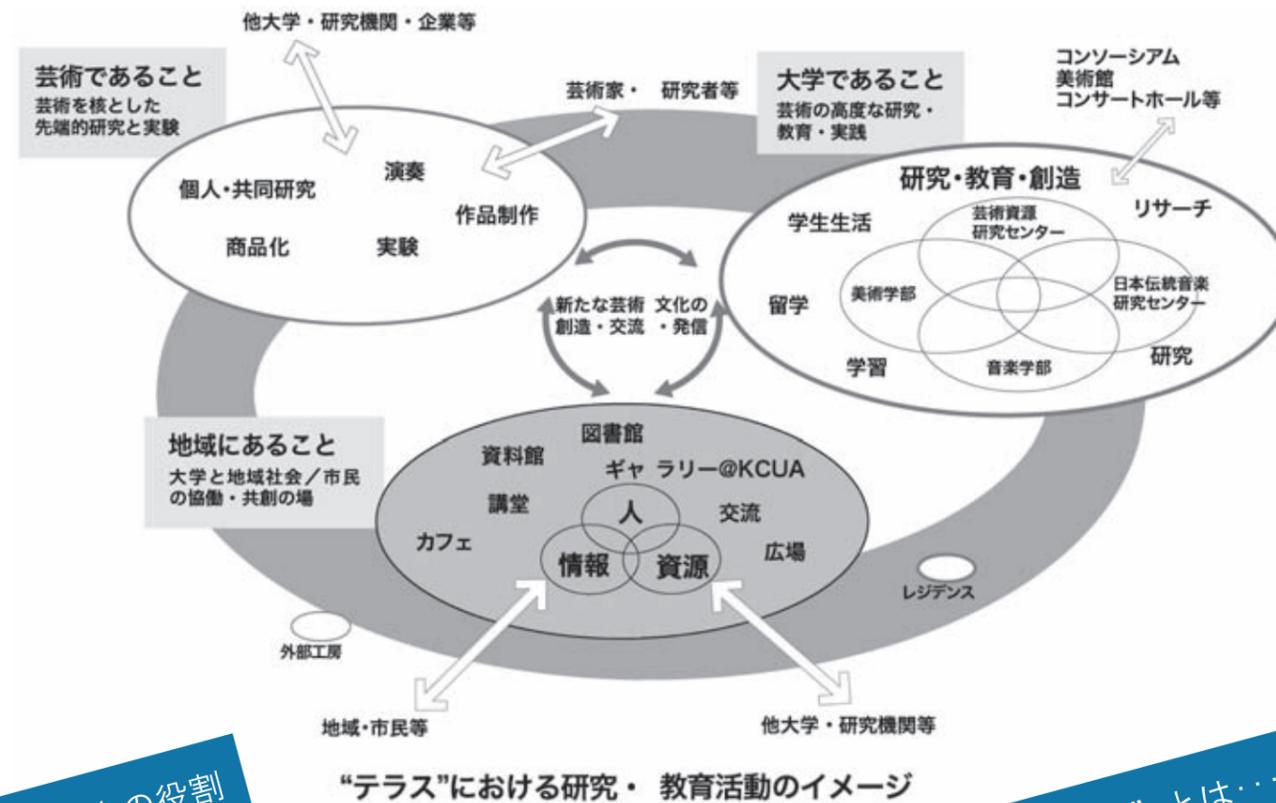
テラス terrace [英], terrasse [仏]
古フランス語では「盛り土」を意味する。語源はラテン語の terra (土, 大地, 地球)
・ 建築におけるテラス: 建物本体からの突き出し部分, 屋根の上の面。
・ 地形におけるテラス: 高低差のある平坦な面。段丘, 棚田など。



① 施設整備方針

- I. 文化芸術による世界の人々との交流を促進するとともに、地域のまちづくりと連動する
- II. 世界に冠たる芸術大学として一層の飛躍を目指すため、教育環境を充実させる
- III. 自由で独創的な研究活動を活発化し、国際的な文化芸術の基軸となるため、研究環境を充実させる
- IV. 教育・研究成果の社会への発信機能を充実させる
- V. 誰もが利用しやすい、安心・安全と景観・環境へ配慮した施設とする

② 基本コンセプト



京都芸大の役割

“テラス”とは…

○芸術であること

日常的な価値観の外側に軸足を置き、エクストラオーディナリーな価値観を提示すること

直近のニーズに応えるのではなく、想像力をもって、こういう生き方、社会のつくり方もあるという、対案（オルタナティブ）を示すことができるのが、芸術の責任である。それはまた伝統を引き継ぎ、かつ問い直すなかで可能となる。

○大学であること

高度な研究・教育とその絶えざる変革を通して、人と人・人と自然の新しいつながり方を提示し、実践すること

大学では、一般社会ではリスクがあると思われることでも、新しいモノの見方や世界へのヴィジョンにつなげるため、失敗を恐れずに取り組まなければならない。

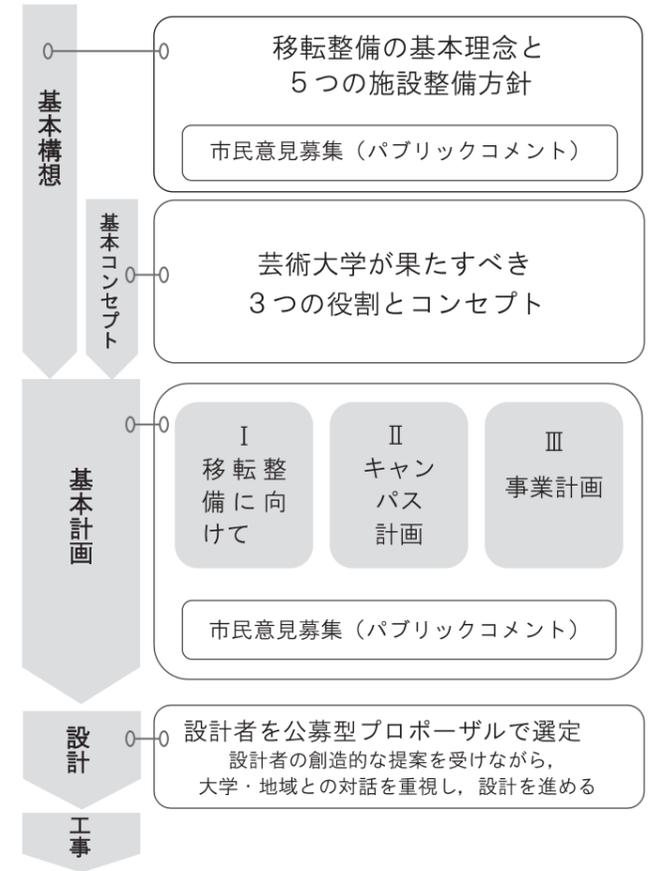
○地域にあること

新しい住民として、地域の歴史を引き継ぎながら、新しい歴史と創造的な地域社会を共につくっていくこと

地域の歴史をふまえ、多様な文化的背景をもった人々とともに、新しい生き方、働き方、コミュニケーションのあり方が共存・活性化し合う地域社会の実現を目指す。

“Terrace (テラス)” としての大学

③ 基本計画の位置付けと今後の進め方



「浮く」

・テラスは、地上から一定程度浮いている場所です。それは、時代や社会のオーディナリー（「普通」や「常識」）な価値観から一定の距離をとりながら、思考し、表現活動を行う芸術の姿につながります。浮くことで、芸術の自由でラディカルな展開が可能となります。
⇒ 芸術であること

「開く/閉じる」

・テラスは、内から外に張り出しています。内と外の境界を開閉することで、外部と交わり合いながら高度な研究・教育を実践する横断性と、失敗を恐れず取り組む専門性を実現できる、リバーシブル（両面性）な関係を築くことが可能となります。
⇒ 大学であること

「十字路」

・テラスは、壁も天井もない広がりをもつ空間です。そこでは、垣根なく外部と交差し、人と人・人と自然の新たな出会いや交流が生まれる十字路として、芸術の研究・教育とその成果を多様に発信することができます。地域の人々・京都市民・世界からの来訪者に開かれ、多文化的な相互交流と創造的な社会実験が可能となります。
⇒ 地域にあること

4

配置計画

移転予定地は現キャンパスよりも敷地面積が減少（約6万8千㎡⇒約3万8千㎡）しますが、次の①～③のとおり、機能の連関性を踏まえた施設の配置や効率的な空間の利用により、延床面積を増加（約3万9千㎡⇒約5万5千㎡）させ、都市中心部において豊かで創造的な活動を展開できる新たな都市型キャンパスとします。

京都芸大の移転に関する基本コンセプト“Terrace（テラス）”としての大学を踏まえ、世界に向けて一層の飛躍を目指す大学としての機能が最大限に発揮され、大学内の連携や成果の発信、大学と市民等の交流が一層生み出せるよう、次の考え方を踏まえ、キャンパス配置を3案検討しました。

今後、設計者による創造的な提案を受けながら、大学や地域と対話を重ね、さらにふさわしい配置を検討していきます。

① 創造性や機能が十分に発揮できる専攻の配置，土地の有効活用

- 美術・音楽その他について、創造性や機能が十分に発揮されるよう配置を行います。
- 事務局や食堂等の共用・厚生施設を効果的に配置し、快適なキャンパスライフとコミュニケーションが活発化するようにします。
- 都市中心部への移転であることと、移転予定地の将来性を踏まえ、できる限り有効な土地活用を図ります。

② 塩小路通沿いを中心に教育研究成果の発信・交流施設を配置

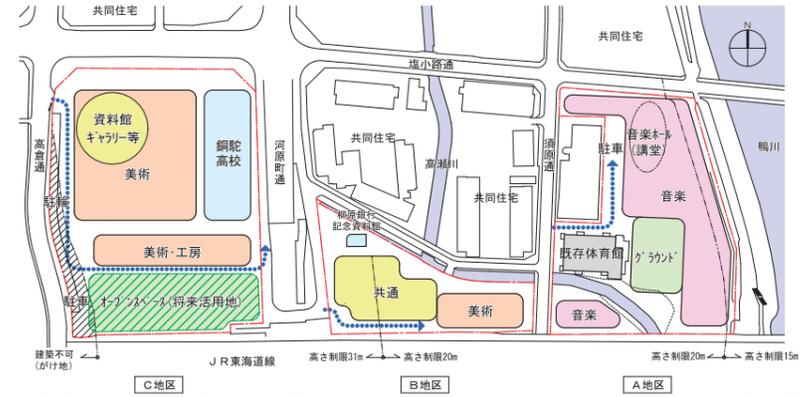
塩小路通沿いを中心に、教育研究成果を広く発信する施設を配置し、市民や国内外から訪れる人々が気軽に立ち寄り、芸術に触れ、多様な交流を行うことを通じて、地域の賑わいや、京都駅と東山文化エリアを結ぶ動線の魅力向上を図ります。

③ 安心・安全と、環境・景観への配慮

- 災害時等において公共施設として一定の役割が果たせるキャンパスを目指します。
- 周辺のまちや居住環境に対する配慮に十分留意するとともに、環境にやさしく、将来にわたり長く快適に使い続けることができるキャンパスとします。
- 鴨川や高瀬川、東山への眺望、周辺のまちなみ景観などの景観特性を考慮しつつ、地域とともにありつづけ、末長く親しまれるデザインとします。

なお、「6 京都芸大以外の施設について」で述べる市立銅駝美術工芸高等学校については、京都芸大との教育・研究活動における連携や施設の共有化を見据えた配置を検討することとします。

1案



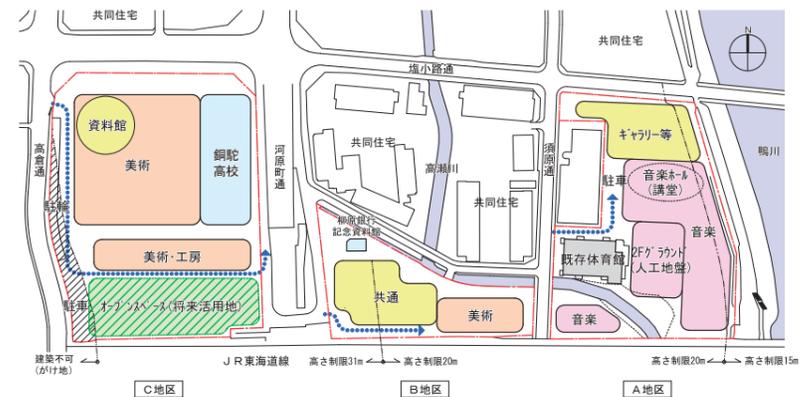
- 学部ごとの機能・設備をできるだけ集約し、一体的な教育研究スペースの形成や効率的な設備配置を可能とするため、C地区を中心に美術学部、A地区に音楽学部を配置する。
- 大学を訪れる人々が気軽に芸術に触れ、多様な交流が生み出されるよう、C地区ではギャラリーや資料館といった展示スペースを、A地区では音楽ホール（講堂）を、塩小路通沿いに配置する。

2案



- 学部を横断した活動・交流を促すため、C地区に美術学部、音楽学部を複合配置する。（C地区に音楽学部を配置するため、美術学部は必要面積を確保するため、A、B、C地区にまたがった配置となる。）
- 大学を訪れる人々が気軽に芸術に触れ、多様な交流が生み出されるよう、C地区では音楽ホール（講堂）や資料館を、A地区ではギャラリーを、塩小路通沿いに配置する。

3案



- 学部ごとの機能・設備をできるだけ集約し、一体的な教育研究スペースの形成や効率的な設備配置を可能とするため、C地区を中心に美術学部、A地区に音楽学部を配置する。
- 京都駅から東山文化エリアをつなぐ動線の魅力向上を一層図り、新たな人の流れを生み出すため、A地区にギャラリーや音楽ホール（講堂）といった発信交流機能を集約する。（A地区にギャラリー、音楽ホール（講堂）及び音楽学部を集約するために、グラウンドは2階レベルとし、下部を音楽学部スペースとして利用する。）

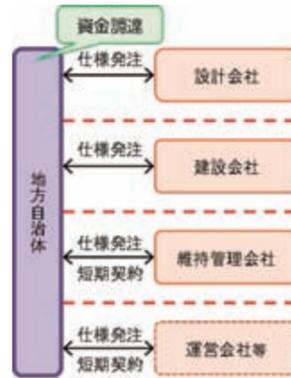
5 事業計画

① 事業手法

本事業における事業手法については、芸術大学の全面移転整備であることに加え、設計・工事の期間が長期にわたるといふ本事業の特殊性や、昨今の建設市場の動向などを踏まえ、検討する必要があります。

本事業においては、設計、工事といった各段階で、ユーザーである京都芸大、その他の関係者の意向を十分に反映させやすく、最新の建設物価や法規制、事業の進捗等に対しても柔軟に対応できる分離発注手法（※）が最適な事業手法であると考えられます。

（※）設計、施工、維持管理に至るまで、本市がそれぞれ仕様を定め、個別に分離発注を行う方式



② 整備スケジュール

- 平成29～31年度 基本設計・実施設計（設計者選定期間含む）
 - 平成32～34年度 工事（施工者選定期間含む）
 - 平成35年度 供用開始（予定）
- （社会経済情勢や財政状況等を踏まえ、必要な場合は、スケジュールを見直します。）

③ 概算整備面積及び事業費

大学の将来を見据えた学外連携スペース等の新たな機能・施設を盛り込むとともに、将来の教育ニーズ等の変化にも対応できるように、建物の延床面積は、全体で約55,000㎡とします。（銅駝高校、既存施設を活用する予定の元崇仁小体育館の面積は除く）

	延床面積	内訳
美術学部・美術研究科	約28,000㎡	各専攻、学部共用
音楽学部・音楽研究科	約10,000㎡	各専攻、学部共用 音楽ホール兼講堂
共通	約17,000㎡	日本伝統音楽研究センター 芸術資源研究センター ギャラリー 等
合計	約55,000㎡	

上記の面積で、試算した結果、現時点で見込まれる概算事業費（設計・調査費、建設費）は約250億円です。今後、基本設計を進める中で具体的に精査し、その時点での建設物価や消費税率等を反映させていくものとします。

6 京都芸大以外の施設について

基本構想において検討することとしていた、芸大との連携により芸術的教育に貢献できる施設及び崇仁保育所の再整備については、以下のとおり検討を進めました。

① 市立銅駝美術工芸高等学校

京都芸大と同じく、京都府画学校を起源とする市立銅駝美術工芸高等学校は、我が国を代表する優れた芸術家を数多く輩出してきた日本で最初の美術工芸専門の学校です。各々の教育・研究活動の相乗効果を図り、文化芸術の創造の拠点としての機能をより一層高めるため、同敷地に移転整備することとします。

【学校の概要】

所在地の住所	京都市中京区土手町通り竹屋町下がる銚田町542番地
人員構成(平成28年5月1日現在)	美術工芸科生徒 278名 教職員 38名
専攻	日本画、洋画、彫刻、漆芸、陶芸、染織、デザイン、ファッションアート
延床面積	約8,000㎡

② 崇仁保育所

移転予定地のB地区にある崇仁保育所については、下京区全体の保育ニーズや園庭面積等十分なスペースの確保、下京涉成小学校との保小連携、京都芸大も含めた三者の連携といった観点から、下京涉成小学校第二教育施設である元六条院小学校の一部（稚松公園（南側）の活用も含めて検討）に移転整備することとします。

新施設の整備については、実績ある社会福祉法人等の豊富な経験と国の保育所等整備交付金を活用し、より良い施設整備と運営を実現する観点から、公募により整備・運営を行う民間事業者を選定することとします。



芸大移転後の跡地活用について

京都芸大はこれまで西京区の皆様に支えられ、発展してきました。芸大移転後の跡地活用については、今年度「西京区・洛西地域の新たな活性化懇談会」により、取りまとめられた活性化ビジョンに込められた区民の皆様の思いを十分に踏まえ、西京区はもとより、京都市全体の発展に資するよう検討していきます。

発行：京都市行財政局総務部総務課
住所：京都市中京区寺町通御池上る上本能寺前町488番地
電話：075-222-3045
FAX：075-222-3838



京都市印刷物 第283250号
平成29年3月